ショートストーリーなごや

コークス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ショートストーリーなごや

【Ｎコード】
Ｎ０８９６Ｘ

【作者名】
コークス

【あらすじ】
なごや駅を住処とする家の無い人々。
その中の二人の男性を描く短編フィクション。

「良い奴もいれば、悪い奴もいる。そんなのって一般人だけに当てはまるわけじゃないだろ？　俺たちホームレスにだって当てはまるもんだ」

ぎらぎらに照る日光を避けるために、駅前のモニュメントに出来る日陰に隠れる俺たち。二人して天を仰いで寝そべっているわけで、当然屋根はなく、目に映るのは空。真っ青とは言い切れないものの、空だ。

俺の隣に寝そべっている相方、通称ジュンさんは急に語りだす。彼は小説家を目指していたと昔一度だけ聞いたことがある。どれほど前だったかはわからないが。

「何かに名前を付けることで意味を持たせてしまう。それが人間の特技でもあるが、弱点でもあるんだ。そう思わないか、ショウ？」

ジュンさんは俺に問いかけてくる。だが俺は彼の望むような答えなどもち合わせてはいない。くぐもった声でああ、と一言言うだけだった。

ジュンさんと俺、ショウ――本名ではなく、偽名。本当はこういう名前がよかった――が出会ったのは幾年か前のことだ。

俺は商社マン。日々黙々と仕事をこなしていた。ある時に帰省することになり、駅前から出ている夜行バスで帰ることにしたのだった。その時に俺に話しかけてきたのが、ジュンさんだった。

「お前に合って俺にないもの。俺に合ってお前にないものってなんだ？」

見るからにみすぼらしく、貧相な格好をしている男だった。相手にするべきではない、頭では理解していた。

「わかるかな、若造」

俺はスクランブル交差点を通り、大きな電気店を横切った先にあるコンビニを目指していた。彼は隣を歩いていた。

何度もわかるかと尋ねてくるジュンさんがうっとおしくなった俺は答えた。
「金だ」
俺は言う。次の瞬間には鞄の中から長財布を取り出し、紙幣を重力に預けた。
それを拾って俺の前から失せろ。ただそれだけだった。
「半分正解。残りは？」
かたくなに問題の答えを言わせたいらしく、紙幣には目も向けていなかった、ように感じた。この後拾いに戻ったというが。
「正解は自由。お前は金を持っている。俺は自由を持っている。それだけだ」
結局自分自身で解答した彼は、満足そうな笑みを浮かべて俺の前からいなくなっていった。
コンビニのトイレ、壁を何度か殴ったのを覚えている。でも臆病で、手には布をかぶせていた。
劇的とは言えないが、普通とは違った初対面をした俺とジュンさんは結局その数年後には同じ駅前に同じ格好でいるわけだ。
「暑くなってきたな」
ジュンさんがこぼす。俺が彼との出会いを回想している内、日陰にいる俺たちでさえいてもたってもいられないような暑さに苦しめられることになっていた。
動きますか？　アイコンタクトと身振りでその意思を伝える。
「ああ」
ジュンさんは返事とともに起き上がる。枕代わりにしていた履物を下におろして履く。
俺とジュンさんは金を稼ぐ。
俺たちのようなやつがどうやって？　と思う人間もいるだろう。だが人の数だけ仕事もあるもの。見向きもされない立場だからこそ出来る仕事もあるわけだ。
そして俺たちは午後いっぱいを仕事に勤しんだ。商社勤めの頃と

比べると割に悪いが、食べていける分ましだったし、食べることだけ考えれば良いだけ楽だった。
弁当を十個、二人合わせて二十個調達。俺たちはこれを仲間内というか、同業者というか、とにかく似たような格好のやつに分けてやる。十八人を救ったわけだ。
「金をどれだけ稼いだところで、意味なんて少ない。人をどれだけ救えたかに意味はあるんだろうな」
ジュンさんと一緒にまた駅前のモニュメントに座りながら弁当を食った。この町は眠らない。そんなこっけいな表現が当てはまってしまうほどいつでも明るく、騒いでいる。
「エアコンの温度は何度までって数年前にくり返し宣伝してたな。結局使った時点で温度差なんて関係なく有害なんだろうにな。その点俺たちこそがまさにエコな人種だろう」
飯時に限らないが、大概の時はジュンさん語録を聞くことになる。単に俺が話さないだけなのだが、それをジュンさんは気にするそぶりも見せない。
それから二日がたち、一週間がたち、一カ月がたった。なかなか厳しく続いた残暑もここのところは息をひそめ、秋の涼しい風が吹き込み、心地よい眠りを甘受できるようになってきた。
季節が変わってもやることは変わらない。四季を意識して生活が変わるのは何かが必要で、その何かが俺たちにはないのだろうと思う。だから俺たちは今も変わらず同じことをして、弁当をもらい、分け与え、命を救っている。
変わらない日々に少しの異常が起きた。
夜中の駅前。ナンパされることを目的にした女性。だが相手が悪ければ断ってその場を離れ、しばらく経つと舞い戻る。くり返しだ。だがそんな中に珍しい姿があった。他の女性と同様に色飾った服装、高い靴、整った髪型。だが他とその女性が違っていた点は、まるで色気がなかったところだろう。年端のいかない少女ではなく、いきすぎた老女だった。声をかける男などいないと思いながらも、興味

しんしんで俺は見ていた。
すると二人の男が老女に話しかけていた。男は両方ともハンサムで若かった。まさかとは思ったが、何が起こるのかが楽しみで久しぶりに心躍った。
だがそんなはずはない。当然だろう。男二人は老女をからかっただけのようで、胸やけのするような笑みを浮かべながら老女から離れていく。老女の表情からは何も読み取れないが、悔しさだとか悲しさだとかを感じているのではないだろうか。
それから何時間も見張っていたが結局老女は一人きりだった。いつの間にか老女は立ち去っており、そこで俺は眠りについた。
「生命の生ける目的が子孫を残すことだとしたら、俺はもう死んだ方がいいのだろうか。俺にはこの遺伝子を残すつもりはさらさらない」
俺が目覚めるとジュンさんは隣で弁当を食べていた。そして膝脇に置いてあったもう一つの弁当を俺に差し出してくれた。俺は受け取り、食す。
昨日の老女が気になっていたが、どうすることも出来ない。身元を調べる手段も元手もない。結局俺たちはまた変わらない日々を過ごした。
下校姿の小学生を見た。そういえば小学校が近くにはあったんだ。俺も昔は小学生で、未来は自分にとって輝かしい光をきらつかせていて、不安はこれっぽちもなかった。それが今ではこういう状態。子どもだった俺は想像できただろうか、今の生活を。
過去を思い出しながら小学生を見ていたが同時に彼らにも見られていた。それは当り前の話なのだろうが、大概は俺たちを脳内変換で見えないものにしてくれる。まだ小学生はそんないやな技を持っていないようだった。長らく笑ったことはなかったが、精一杯の笑顔を向けてみた。走り去る小学生ども。
厄介なことになるのは困る。俺も少しだけ童心に戻り、逃げるように走り去った。

今日は街中をぶらぶらと歩いていた。意味はある。らしい。理由もわからないがそれが指示されたことなのだから仕方がない。自由に歩き回っていいという話なので、長らく通っていない道を歩いていた。

俺は二時間ほどをかけて川沿いに出た。久しぶりに見た木曽川。特に感慨にふけるわけではないが、なんとなくこう自然の偉大さだとかを感じられた。

俺の実家は田舎で、子どもの頃は川遊びをよくしていた。懐かしい。

河原で遊ぶ影はなかった。これだけ大きいと中に入るわけにはいかないのだろう。もしくは川遊びの楽しさを知らないのだろう。

川沿いをずっと湾に向かって歩いていく。道々で同じ穴のむじなに会う。初対面もいればそうでないものもいる。弁当を分けた者もおり、話しかけられたりもした。感謝されると恥ずかしながらうれしいものだ。

結局湾に出るのは諦めて、今は駅前に戻っている。夜道を戻ってくるのか急に恐ろしくなったからだ。とにかく今日も弁当をもらえたし、腹は膨れた。それだけで充分だった。

その晩も老女は現れた。やはり誘われることはなく、夜明け前には姿を消していた。

翌朝、それは突然訪れた。

「例えば偶然拾った宝くじ。それが当たっていたらどうする」

意味深長なことを聞いてきたジュンさん。

「額が額なだけに驚き戸惑いを隠せない。いったい何に使うか迷って決められない」

話を察するに当選したのだろう。十万もあたっていれば手に余る。

「今の生活に満足しているから必要ない。さりとて当選しているものを破り捨てるのは道理ではない」

ごもっともな意見だ。十万もあれば何回楽を出来るかわからない。

「だからこれをどうすればいいか。教えてくれないだろうか？」

俺に答えられる質問ではない。そう思い口を閉ざしたままでいた。きっとジュンさんは自分で答えを導き出すだろう。
宝くじ問題は置いておき、俺たちは今日も動いた。一日の飯を稼がなくてはならない。これは自分のためだけではなく、俺たちからの分け前を待つ彼らのためでもある。同時に俺の良心を慰めるためでもあるのだ。
広い路地、たくさんの群衆が歩く中でよく見つけたと思う。例の老女が歩いていた。隣には少しばかり背の低い女性。いや女の子だろうか。もしかしたら孫かもしれない。
俺はさりげなく、何でもない顔をして二人に近づいてみた。前を歩く二人の会話を盗み聞こうと思った。
そこで気付いた。周りの他人たちのような格好であれば不自然ではないが、俺のようなふしだらな男が、老女と女の子の後ろを歩いていたら怪しいこと甚だしいだろう。それでも起りうる危険性よりも、老女への興味が打ち勝ってしまった。俺は二人の後ろを何気ない様子で歩いてみせた。
「やっぱり無理なんじゃないの？」
「そにゃあことねえ。絶対現れる」
女の子の問いに答える老女。何の話なのだろうか。
「やっぱりそういう線の人に頼んだ方がいいと思うよ、カナは」
「いんや、絶対現れる」
老女は聞く耳を持たない様子。女の子はあきれたような声だった。
「それよりもお昼はどこで食べるの？」
女の子は道通りの店をちらちらと見やり、不幸なことに後ろを振り向いてしまった。目が合う。
「この前のおじさんだ」
恐れるではなく、面白がるような声の調子だった。その声で老女も俺の方を振り向く。
「あんたかえ」
老女の一言に動揺を隠せなかった。知られている。いったいなぜ。

そして俺はあれよこれよと言う間に女の子に口車に乗せられる形になり、三人でファミレスに入った。
ホームレスと老女と小学生。不思議を通り越して謎の集団だ。老女の驕りという話でなければご一緒はしなかった。
「おじさんこの前小学校の前にいたでしょ？　カナのこと覚えてる？」
もしかしたら笑顔に逃げ出した彼らの一員なのだろうか。俺は頷く。
「この男は毎晩あたしのことを見てるんだい。全くいやらしい。惚れちまったのかえ？」
勘違いだ。老女に惚れることはない。断言できる。
「そんなわけないじゃん。ばあに惚れるもの好きなんてじいしかいないって」
女の子、カナちゃんは子供らしいからからとした笑い声をあげた。
料理を食べている間、老女と小学生が話すばかりで俺は聞き役に徹していた。そして勘定を払い、ファミレスをあとにする。
「またねー」
カナちゃんが手を振る。小さく振り返す。老女は何も言わず行ってしまった。その傍らを小学生はついていってしまった。
俺は仕事をすっかり忘れていたことを思い出した。日はもう沈み始める。今日はもう無理だろう。今日俺に救われる命に心の中で謝罪し、ジュンさんの弁当に期待することにする。そして駅前のいつもの場所に戻っていった。だがその日、ジュンさんは戻ってこなかった。
明くる日、起きるとジュンさんは隣に佇んでいた。話しかけられないような、重苦しい空気をまとっているかのように感じられた。
「ショウ。出会いは別れの始まりで、別れは出会いの終わりだ。だからどうということはない。忘れてしまえばいいだけだ」
ジュンさんの方から話しかけてきた。
「ピリオドを打つ。そういう言葉は今使うためにあるのだと思う。

これを」
ジュンさんはＡ４サイズの封筒を俺に手渡す。受け取るとずしりと重みがあった。
「お前はそれで米国へ行くんだ。それだけあれば事足りるはず」
ジュンさんは立ち上がると、俺に背を向けて歩き始めた。引きとめたいのだが、声をかけることは出来なかった。正確には出すことが出来なかった。
いつからかだろうか、恐らくこの生活を始めてからすぐだったか。俺はまともに話せなくなってしまった。不気味に思う他人ばかりだった。だがジュンさんだけは違った。いつしかジュンさんと一緒にいた。そしてジュンさんは俺のもとからいなくなってしまった。多分だけどもう会えないと思う。多分なのだが確実に思えてしまう。
俺は駅前のモニュメントから急いで離れ、普段は決して入ることのない駅構内の便所に入る。個室に行き、鍵をかけ、座りこむ。一呼吸置いてからジュンさんから手渡された封筒の中身を確認する。思った通りだった。中には札束がいくつも入っていた。
俺は封筒を上半身の衣服に隠し、辺りを警戒しながら出る。紙幣を一枚だけ細かくくずし、封筒は駅のロッカーにしまった。これで一安心だろう。
俺はこの町を、この国を立つ決意を固めようとしていた。やり残したことをやろうと思った。だがその数の多さに気付かされた。
私立の大学までいかせてくれた両親。永遠を誓ったはずの婚約相手。辛苦をなめた同僚たち。今の生活に陥る前の人達には何も出来ないと思う。それならば今の生活で出会った人か。だが俺はジュンさん以外とは仲良くはない。思い残すことはない。そこで思い立ったのが老女と小学生だった。
せめて彼らの助けになることができれば、俺は今よりもずっと自分を許せる。
俺は駅構内から出る。どこに行けば二人に会えるだろうか。俺は迷いながらも小学校に向かった。

まだ時刻は昼前。小学校は放課ではない。俺は学校の敷地周辺をまわっていた。
何週目かに入ると学校から鐘の音が響く。学校の校舎の様子を窺って見ると、次第に生徒たちが現れてきた。もう放課なのだろうか。
だが困ったことに連絡手段がない。俺は仕方なく校門近くの電柱に寄りかかり、出来るだけ怪しく見えないように努力した。
「あれ、なにしてるのー」
小学生、カナちゃんの方から話しかけてくれた。俺はあらかじめ書いておいたメモを彼女に見せる。
「んー、じゃあついてきて」
そういうが早いか、カナちゃんは小走りに行ってしまった。仕方なく俺も走るはめになる。
五分ほど走った。息が苦しくなっている。だが前をいく姿はまるで止まらない。
すると一軒の平屋建ての門前で彼女は止まった。
「どうぞ」
そういうと門を開き、俺を招き入れる。俺は神妙な表情をしていたと思う。緊張して門をくぐり、家屋の中へと入っていった。
「ばあ、この前のおじさんが連れてきた」
カナちゃんは俺に進むべき方向を指さし、彼女自身は違う部屋に向かった。俺は示された部屋に入る。
老女はいた。
「もう会えないんだや」
老女は言った。
「じいは前から失踪癖があってな。今回もまた同じだと思っとった。だけど何カ月たっても戻らない。だからあたしは駅でまっとった。じいとの出会いも駅前でのナンパだったんでね」
「じいはニンチショウだったんだって」
別の部屋からカナちゃんの声が聞こえた。
「帰ってきたくても戻れなかったんだ」

老女は初めてみた時とはまるで別人のようだった。中身がない、精力がない、まさにそれだった。
老女が沈み込んでいる、その目の前には仏壇が据えてあった。
「猫みたいな人やったしね」
老女はぽつりとつぶやいた。この時の無表情は、初めてみた無表情とはまた違っていて、俺にはやはり彼女の気持ちは推し量れなかった。
俺は仏壇に祈ろうとはしなかった。祈れなかった。後ろを振り向き、玄関に向かう。
「またねー」
カナちゃんの声。俺はかすかにまたなと呟いた。
結局俺に出来ることなど何もなかったのだろうと思う。
駅内のロッカーから封筒を取り出す。封筒を大切に抱え、俺は新幹線の切符を買う。とりあえず行こう。行った先で何もかも考えよう。
俺には何がある？　金も時間もある。今なら両方とも持ち合わせている。
その二つを使って何が取り返せる？　取り返せるものがないかもしれない。答えなど返ってこない。
俺は新幹線の席で、静かに眠りについた。

（後書き）

投稿処女作と呼んでいいのかしら。
とにかく閲覧ありがとうございます。
とある賞がありまして、それに投稿しようと一気に執筆したものの、
その賞の過去受賞作品などを見てあまりのレベルの違いに落ち込み、
そのまま蔵入りしてたものです。
この作品以外にも閲覧していただけたら幸いです。
本当にありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0896x/

ショートストーリーなごや

2011年9月27日02時29分発行